

## ダニエル書 - 第四十四号

失われた基盤を明らかにする：ウィリアム・ミラーの預言的真理とアドベンチズムの最後の日々

Jeff Pippenger

2024-01-08

ウィリアム・ミラーの根本的な真理は、アドベンティズムの四世代を通して覆い隠されてきた。これらの根本的な真理の回復は、彼の第二の夢で示され、また聖書と預言の霊において、神の終末の民が成し遂げるべき働きとして繰り返し示されている。ミラーの夢は、ほこり払いの男が宝石を元に戻すと、それらが太陽よりも十倍明るく輝くことを示している。

ミラーの枠組みは、異教に続く教皇制という二つの荒廃させる勢力を認識することに基づいており、テサロニケ人への手紙第2章における使徒パウロの証言が、その枠組みの錨をミラーに与えた。そこでパウロは、異教ローマが取り除かれるまで、教皇制の台頭が抑えられていたことを示している。テサロニケ人への手紙第二においてパウロはまた、同章の「罪の人」がダニエル書11章36節の自らを高める王としても表されていると指摘することで、フューチャー・フォー・アメリカの枠組みの錨も提供した。

重要なのは、第一と第三の天使の運動における知識の増加が、テサロニケ人への手紙第2章にあるパウロの証しと直接結びついていたということである。終わりの時に当たる1798年に、そして1989年にも、ダニエル書の封印が解かれ、こうして三段階の試練の過程が始まった。この試練の過程は、ダニエル書の封印が解かれる歴史において、常に礼拝者を二つの群に分ける結果を生み出す。終わりの時における知識の増加とパウロの著作を関連づけて見ることは不可欠である。というのも、まさにその章でパウロは、「真理への愛」を受け入れない者は神からの強い感らしを受けると警告しているからである。この強い感らしこそ、知識の増加を拒む悪しき者たちに臨むものとして、ダニエル書12章に記されている。両方の歴史において、この強い感らしは最も直接的にはアドベンティズムを指している。

表面に現れたことの背後を見通し、すべての人の心を読み取る方は、大いなる光を受けた者たちについてこう言われる。「彼らは自らの道徳的・霊的状态のゆえに悩み苦しむ、驚いているのではない。まことに、彼らは自分自身の道を選び、その魂は彼らの忌むべき行いを喜んでいる。わたしもまた彼らの惑いを選び、彼らにその恐れを臨ませる。わたしが呼んだとき、答える者はひとりもおらず、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかった。しかし、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。」

「神は彼らに強い感らしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。」

「彼らが救われるために真理への愛を受け入れなかったからである。」

「しかし、不義を喜んだ。」

イザヤ書66:3、4; テサロニケ人への第二の手紙2:11、10、12.

天の教師は問いかけた。「実際には世俗の方策に従って多くのことを行い、エホバに対して罪を犯しているのに、自分は正しい土台の上に建てており、神が自分の業を受け入れておられるのだと思い込むこと——これ以上に心を惑わす強い迷妄がほかにあるだろうか。ああ、かつて真理を知った者たちが、敬虔のかたちをその霊と力と取り違えるとき、人の心をとらえるのは、大いなる欺きであり、魅惑的な迷妄である。彼らは自分たちは富み、財にあふれ、何一つ必要としていないと思い込んでいるが、実際にはあらゆるものを必要としているのだ。」

衣を汚れのないままに保っている忠実なしもべたちに対して、神は変わっておられない。しかし、多くの者は「平和だ、安全だ」と叫んでいるが、その一方で、突如として滅びが彼らに臨もうとしている。徹底した悔い改めがなく、人々が罪を告白して心をへりくだらせ、イエスにあるとおりの真理を受け入れないかぎり、彼らは決して天に入ることはない。私たちの間に清めが行われるとき、私たちはもはや、富んでおり、財が増し加わって、何一つ必要がないと誇って、安逸に安住することはなくなる。

『私たちの金は火で精錬され、私たちの衣は世から汚されていない』と真実に言える者は、いったい誰か。私は、私たちの指導者が、いわゆる義の衣を指し示しておられるのを見た。それらを脱がせ、その下にある汚れをあらわにされた。すると彼は私に言われた。「彼らが自分たちの汚れと品性の腐敗を、いかに見せかけで覆い隠しているか、あなたには見えないのか。『忠信の都が、どうして淫婦となったのか！』わたしの父の家は商売の家とされ、神の臨在と栄光の去った場所となっている！このゆえに弱さがあり、力が欠けているのだ。」 『証言』第8巻、249、250頁。

アドベンチズムは、1844年に「真夜中の叫び」を宣べ伝えたとき、「忠実な都」であった。1863年までには、ウィリアム・ミラーの働きを通して据えられた「基礎」を拒否する道を歩み始めていた。彼らとその根本的な真理を脇に退け、偽の宝石や硬貨でそれらを覆い隠すようになったとき、彼らは新たな基礎を築いていたのである。その働きを始め、遂行し、今も続けている者たちは、「預言の霊」の著作において「大いなる光を受けた者たち」として表されている。

彼らがかつて持っていた「大いなる光」は、ミラーの夢の中では小箱の中の宝石として表されており、ミラーが自分の部屋の中央にある机の上にその小箱を置くと、それは「太陽」よりも明るく輝いた。先に引用した箇所ではホワイト姉妹は、「大いなる光を受けた者たち」だが「自分の道を選んだ」者たちを指摘している。

彼らは1863年に新しい道を選んだ。彼女はそれを「それは、かつて真理を知った人々が敬虔の形をその霊と力と取り違え、また自分たちは富み、財が増し加わり、何も必要としていないと思い込むが、実際にはあらゆるものを必要としているときに、人の心を支配する魅惑的な妄想である」と言う。

彼女はラオデキア的な状態を指摘しており、彼女と夫はそれが1856年に起こったと認識していた。その後、彼らは七年間試されたが、1863年にその試練に失敗し、テサロニケ書でパウロが警告した「強い惑わし」を招く偽りの土台を築き始めた。テサロニケ書におけるパウロの警告は、アドベンチズムの始まりと終わりの双方の運動にとっての錨であり、アドベンチズムの始まりと終わりの双方を扱うミラーの夢とも完全に一致する。彼の夢は、真理という本来の宝石を回復する働きが成就するとき、それらの真理が、アドベン

チズムの初期に真夜中の叫びのもとで最初に輝いたときよりも十倍明るく輝くことを示している。では、ミラーの理解が、彼が最初にその真理を認識したときよりも今のほうがいっそう明るく輝くとは、どういうことなのか。

ハバクク書2章の二つの聖なる図表には、いくつかの真理が示されている。それらの真理はミラーの夢の中で、真夜中の叫びの直前、終わりの時に最終的に回復される宝石として表されていた。ミラーの夢で窓から持ち出される偽物の宝石は、アドベンチズムに持ち込まれて偽の土台を築き、真の土台を隠すための偽りの教理を表すと同時に、その偽の土台を形作っている偽りの教理を手放すことを拒む人々も表している。「the daily」は、元の土台を確立したウィリアム・ミラーの真理の枠組みの錨であり、そして終わりの時においては、ミラーが正しく見抜いたように異教を象徴するだけでなく、偽の土台を生み出した反逆の象徴でもある。

聖書、預言の霊、そして歴史は皆、1798年から1844年にかけての裁きの時の叫びが、ウィリアム・ミラーが見だし提示したメッセージの宣言であったことを証言している。だからこそ、その運動はミラー派運動と呼ばれるのである。論理的に言えば、その運動を退けることは、1798年に生じた光、すなわちダニエルが知識の増加と認めたものを退けることに等しい。

イザヤはエフライムの酔いどれたちについて語り、その酔いどれたちを、エルサレムの民を治めるあざける者たちだと特定している。イザヤは、彼らは文字どおりのぶどう酒に酔っているのではなく、霊的なぶどう酒に酔っているのだと指摘する。聖書における霊的なぶどう酒は、文脈によって、真の教義か偽りの教義のいずれかを指す。エフライムの酔いどれたちは偽りの教義に酔っており、それは『黙示録』第十七章のツロの淫婦や、宴にふけたベルシャザルの最後の夜に示されるバビロンのぶどう酒である。

イザヤは、エルサレムの民を治める嘲る者たちに降りかかる霊的な酩酊の影響を指摘した。

立ち止まって驚け、叫べ、さらに叫べ。彼らは酒によらずに酔い、強い酒によらずによろめく。主があなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目を閉ざされたからだ。預言者とあなたがたの指導者、すなわち先見者たちを覆われた。そして、すべての幻は、封をされた書物のことばのようになった。人々がそれを学のある者に渡して「どうかこれを読んでください」と言っても、彼は「読めない。封印されているからだ」と言う。また、その書を学のない者に渡して「どうかこれを読んでください」と言えば、彼は「私は学がない」と言う。それゆえ主は言われる。この民は口でわたしに近づき、唇でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の戒めによって教え込まれたものだ。だから見よ、わたしはこの民のうちに驚くべきわざ、まさに不思議なわざを行う。彼らの賢い者の知恵は滅び、思慮ある者の理解は隠される。災いだ、主から自分の計りごとを深く隠そうとし、その業を闇の中で行い、「だれが私たちを見るのか。だれが私たちを知るのか」と言う者たち。まことに、あなたがたは物事を逆さまにしている。陶器師の粘土のように見なされるのだ。造られた物が、それを造った者について「彼は私を造らなかった」と言えるだろうか。形づくられた物が、それを形づくった者について「彼には理解がない」と言えるだろうか。イザヤ書 29:9-16。

シスター・ホワイトはこれらの聖句を引用し、次のように付け加える：

ここで語られていることは一言一句まで成就する。神の前に心を低くせず、正しく歩もうとしない者たちがいる。彼らは真の目的を隠し、偽りを愛し偽りを作る墮天使との交わりを保っている。敵は、部分的に暗闇にいる者たちを欺くために用いることのできる人々に、自分の霊を与える。幾人かは、はびこる闇に染まり、真理を退けて誤りを選んでいく。預言が指し示した日は来た。イエス・キリストは理解されていない。イエス・キリストは彼らにとって寓話にすぎない。地の歴史のこの段階で、多くの者が酔った人のように振る舞っている。「立ち止まって驚け。叫べ、また叫べ。彼らは酔っているが、ぶどう酒によるのではない。よろめいているが、濃い酒によるのではない。主があなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目を閉ざされたからだ。主は、預言者とあなたがたの支配者、すなわち先見者たちに覆いをかけられた。」自分たちこそ高くされる民だと思い込んでいる多くの者に、霊的な酩酊が及んでいる。彼らの宗教的信仰は、この聖句が示すとおりである。その影響下では、彼らはまっすぐ歩むことができない。行いの道筋に曲がった道をつくる。一人また一人と、よろめき、行きつ戻りつする。彼らは主に大いなるあわれみをもって見られている。真理の道を彼らは知らない。彼らは科学めかした策略家であり、本来なら霊の澄んだ視力によって助けることができ、また助けるべきであった者たちまでも、自ら欺かれて悪しき業を支えている。

この終わりの時代の動向は、まもなく帰趨が定まる。これらの心霊術的な欺瞞が、その正体-悪霊の密かな働き-であることが暴かれるとき、それらに関わってきた者たちは、正気を失った人ようになる。

「それゆえ主は言われる。『この民は口でわたしに近づき、唇でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れており、わたしへの畏れは人間の戒めによって教え込まれたものだ。だからこそ、見よ、わたしはこの民の間で驚くべきわざ、まことに驚くべきわざと不思議を行う。彼らの知者の知恵は滅び、思慮ある者の理解は隠される。主からその計りごとを深く隠し、そのわざを暗闇で行い、『誰がわれらを見ているのか、誰がわれらを知っているのか』と言う者には、わざわいだ。まことに、あなたがたの物事をさかさまにするあり方は、陶器師と粘土を取り違えるのに等しい。造られたものが、それを造った者について「彼は私を造らなかった」と言えるだろうか。形作られたものが、それを形作った者について「彼には理解がなかった」と言えるだろうか。』」

私には、私たちの経験において、まさにこのような事態にすでに出会っており、今もなお直面していることが示されています。大いなる光と驚くべき特権を与えられてきた人々が、自分を賢いと思い、主から大いに恵みと祝福を受けてきたものの、神の御手から自らを外して敵の陣営に身を置いてしまった指導者たちの言葉を受け入れてしまっているのです。世界はもっともらしい誤謬であふれかえることになるでしょう。これらの誤謬を受け入れた一人の人間の心が、神の真理の尊い証拠を偽りへと変えてきた他の人々の心に働きかけます。本来なら、申し開きをしなければならない者として、魂のために見張る忠実な守護者として立つべきであったのに、彼らは墮落した天使たちに欺かれるでしょう。彼らは戦いの武器を置き、惑わす霊に耳を傾けてきました。彼らは神の勧告を無にし、その警告と戒めを退け、惑わす霊と悪魔の教理に耳を傾け

て、明らかにサタンの側に立っているのです。

本来、強い酒に酔った者のようによろめくべきではない人々が、今や霊的な酩酊に陥っている。犯罪や乱れ、詐欺、欺き、不公正な取引が、天の宮廷で反逆した指導者の教えに従って、世界を満たしている。

歴史は繰り返される。近い将来に何が起こるかを詳しく述べることもできるが、まだその時ではない。死者の姿がサタンの巧妙な策略によって現れ、偽りを愛し偽りを作り出す者と多くの者が手を結ぶだろう。私は私たちの民に警告する。私たちのただ中で、ある者は信仰から離れ、人を惑わす霊や悪魔の教えに耳を傾け、そのために真理は悪しざまに言われるようになるだろう。バトルクリーク書簡、123-125。

イザヤやホワイト夫人を含むすべての預言者は、終末の時代を指し示している。この時代においてアドベンティズムの指導者たちは「惑わす霊と悪魔の教理に耳を傾け、明らかにサタンの側に立っている」。ホワイト夫人は次のように述べて予言している。「これらの心霊主義的な欺きが、その実体-すなわち悪霊の秘かな働き-であることが明らかにされる時、それらに関わってきた者たちは、正気を失った人のようになるだろう。」終末の歴史のある時点で、彼らの酩酊が「悪霊の秘かな働き」であることが明らかにされる時、アドベンティズムの指導部は正気を失った人のようになるだろう。

終わりの時、エルサレムで民を治める嘲る者たちの働きの封印が解かれる。その封印の解除はミラーの夢で示されており、ミラーが祈ったときに扉が開いた。それは、彼がほんの少しの間目を閉じる直前に起こり、十四万四千人の封印の過程のまさに終わりを示している。扉が開くことは経綸の転換を示し、その時点で第三天使のラオデキヤ的運動は第三天使のフィラデルフィア的運動へと移行する。

イザヤ書の一箇所には、エフライムの酔いどれたち、すなわち「忠実な守護者として立つべきであった」男たちの悪行の要約がある。その要約は次のように表されている。「まことに、あなたがたが物事をさかさまにすることは、陶器師の粘土のように見なされよう。作られたものが、それを造った者に向かって、『彼は私を造らなかった』と言うだろうか。あるいは、形作られたものが、それを形作った者に向かって、『彼には理解がない』と言うだろうか。」

ミラーが「the daily」を異教という宗教、または異教ローマのいずれかだと同定したことは、究極的にはサタンの象徴である。というのも、サタンと異教ローマはどちらも竜として表されているからだ。

このように、竜は第一義的にはサタンを表しているが、第二義的には異教ローマの象徴である。『大争闘』439頁。

終わりの時にエルサレムを支配する人々について、ホワイト夫人は次のように述べている。「ある者たちは、はびこる暗闇に染まり、真理を退けて誤りを選んでいく。預言によって指し示された日が来た。イエス・キリストは理解されていない。イエス・キリストは彼らにとって作り話である。」

1901年、ドイツ出身のアドベンティズムの指導者が、ダニエル書における「the daily」についての、背教的プロテスタントの誤った見解を持ち込み始めた。その見解は、「the da

ily」がキリストの聖所における働きを表しているとするか、その考えの変形である。私  
が変形と言うのは、1901年以後の歴史を通じてその虚偽にはさまざまな強調が置かれて  
きたからだが、そうした誤った見解は常に、「the  
daily」がキリストの何らかの働きを表しているという結論を示すからである。

終末時代のアドベンチズムでは、ミラーが悪魔の象徴だと見なした「the daily」という  
教理の宝石が、キリストの象徴とされている。1901年にこの見解が導入された当初、「th  
e daily」はサタンの象徴ではなくキリストの象徴であるという見方を受け入れた者はご  
くわずかだった。だが1930年代までには、第二テサロニケ2章に見いだされる真理の鉱脈  
からミラーが掘り出した「the  
daily」の教理という宝石は、1863年にレビ記26章の「seven times」が退けられたのと  
同様に、退けられてしまった。1863年から1930年代に至る歴史のどこかで、アドベンチズ  
ムは気づかないうちに指導者を変えてしまっていた。

兄弟たちよ、私はあなたがたの危うさを見ている。重ねて問う。過ちを犯しているあな  
たがたは、その誤りを正そうと努力しているのか。あなたがたが自分の足のために道  
をまっすぐにしてこなかったために、魂はつまずきつつ暗闇の中を歩んでいるかもし  
れない。もしあなたがたが信任の地位にあるなら、なおさら切に訴える。あなたがた自  
身の魂のために、またあなたがたを導き手と仰ぐ者たちのために、犯したすべての過  
ちを神の御前で悔い改め、誤りを告白しなさい。

もし、かたくなな心に身を任せ、誇りと自己義のために自分の過ちを告白しないなら  
、あなたはサタンの誘惑にさらされたままにされるでしょう。主があなたの誤りを示  
されるときに悔い改めも告白もしないなら、主の摂理はあなたを同じ道を何度も通ら  
せるでしょう。あなたは同種の過ちを犯すに任され、知恵に欠けたままで、罪を義と  
呼び、義を罪と呼ぶようになるでしょう。この終わりの時代にはびこる数多くの欺瞞  
があなたを取り囲み、あなたは導き手を取り替えてしまいながら、そのことに気づき  
もしないでしょう。Review and Herald、1890年12月16日。

エルサレムの民を支配する嘲る者たち、すなわち「信任の地位にある」人々は、「罪を  
義と呼び、義を罪と呼ぶ」ようになり、また「まことに、あなたがたの物事を逆さまに  
することは陶工の粘土と見なされる。作られたものが、それを造った者に向かって『彼は  
私を造らなかった』と言うだろうか。形作られたものが、それを形作った者に向かって『  
彼には理解がなかった』と言うだろうか」となる。アドベンチズムの四世代にわたる進  
行的な反逆の中で、信任の地位にある者たちは指導者を変えるが、それに気づかない。彼  
らはそれを知らない。というのも、自分たちの誤りの証拠を段階的に、しかも一貫して退  
けてきたからである。その進行的な反逆の中で「彼らの知者の知恵は滅び、彼らの賢者の  
悟りは隠される」。

彼らは物事をひっくり返し、罪を義と呼び、義を罪と呼ぶ。この反逆の象徴は「the dai  
ly」という教義であり、ウィリアム・ミラーにとってはサタンの象徴であったが、今日  
のアドベンチズムはそれをキリストの象徴と見なしている。かつてウィリアム・ミラー  
の預言の適用の枠組みを打ち立てた錨であったものが、今やエルサレムの民を支配する  
あざける者たちの醜悪の象徴となっている。ダニエル書における「the daily」に関連す  
る象徴は、アドベンチズムの始まりにミラーの小箱で認識されたとき、太陽のように

明るく輝いたが、終わりの日にはその真理は十倍も明るく輝く。十という数は試みの象徴であり、古代イスラエルにとって第十の試みが最後の試みであったからである。

現代のパリサイ人たちは、「キリストのわざ」を「悪魔的な勢力」に「帰した」うえで、異教を「神の聖なる力」と見なしている。

パリサイ人は聖霊に対して罪を犯した。彼らの弁舌の才は世の贖い主を罵倒するために用いられ、記録の天使が彼らの言葉を天の書に書き記した。彼らは、キリストの御業に現れた神の聖なる力を、悪魔の勢力の働きに帰した。彼らはその驚くべき御業を無視することも、自然の原因に帰することもできなかったので、「それは悪魔の業だ」と言った。不信のゆえに、彼らは神の御子をただの人間として語った。彼らの目の前で行われた癒しの業、すなわち誰も行ったことがなく、また誰にも行うことのできない業は神の力の現れであったが、彼らはキリストが地獄の勢力と結託していると非難した。頑なで、不機嫌で、鉄のように冷たい心で、彼らはあらゆる証拠に目を閉じることを決め、このようにして赦されざる罪を犯した。Manuscript Releases  
第4巻、360ページ。

私たちは、第一の天使の運動において封印が解かれた知識の増大についての考察を、次の記事で続けます。